

特別会員寄稿

お茶は根入りの金



文化財保存全国協議会会員 門内 政広



皆さんも普段からお茶をよく飲まれると思いますが、ご存知のように狭山丘陵周辺の名産に「狭山茶」があります。今回は、お茶について簡単に触れたいと思います。

お茶の歴史

お茶の歴史は古く、日本では中国から仏教とともに伝わりました。その始まりは、8～9 世紀頃に唐に渡った留学僧が茶の種をいっしょに持ち帰ったことによります。この頃のお茶は、主として薬用に使われ、庶民の飲み物とはなっていなかったようです。

鎌倉時代に入って、栄西（ようさい）〔臨済宗の開祖〕が南宋から持ち帰った「抹茶法」により、「抹茶」が禅宗寺院から社会の各層へと徐々に広がっていきました。栄西から贈られた茶の種を明恵上人（みょうえ しょうにん）は京都の栴尾（とがのお）などに植えました。

「煎茶」については、当初、生の茶葉を鉄の釜で炒って作る釜炒茶（かまいりちゃ）で、飲む時にお茶を湯で煮出しました。元文年間（1736～1740 年）に煎茶の製法をほぼ現在のよう形に改良したのが、京都の永谷宗円（ながたに そうえん）です。永谷宗円は、抹茶の製法であった蒸しの工程を取り入れることにより、急須に茶葉を入れて湯を注ぐ「出し茶」を完成させました。現在も 9 代目永谷宗円によって京都の永谷宗園茶店として受け継がれています。また、永谷宗円の子孫の一人が現在の「永谷園」を開業しました。

狭山茶の起源

さて、狭山丘陵周辺では、江戸時代に入ってから茶の栽培が普及していきました。もともと、この辺りの茶は「河越茶」として南北朝時代に川越で栽培されたのが最初であるといわれています。

元禄 7（1694）年、柳沢吉保（やなぎさわ よしやす）によって三富新田が開拓されますが、三富の畑の土は腐植土壌で軽く、北西の季節風が強い地域であるため、農作物の防風、土留めと畑の境界などを兼ねて茶が畦畔（けいはん）に植えられました。

三富新田の多福寺の洞天和尚（どうてん おしよ

う）は、茶の苗畑を作り、茶の種を三富の村人に配って茶の栽培に力を入れました。

ちなみに、畑の畦畔に植えた茶は畦畔茶（けいはんちゃ）、茶だけを栽培した畑は本茶園（ほんちゃえん）と呼ばれます。

なお、江戸時代の新田開発によってできた村だけでなく、もともと狭山丘陵にあった村々でも主に丘陵の斜地を畑にしていたことから、土留めと畑の境界を兼ねて茶が植えられました。「狭山茶」が江戸の人たちに広く飲まれるようになったのは、江戸時代の後期（1800 年代初め）に、当時の狭山村（入間市）の吉川温恭（よしかわ よしずみ）、村野盛政（むらの もりまさ）、指田半右衛門（さしだ はんえもん）が試行錯誤を重ね、製茶の道具を考案し、製茶の方法の改善に取り組んだことによります。新たな茶づくりが確立され、この地域で生産されたお茶は商人の山本嘉兵衛（やまもと かへえ）の協力によって江戸の日本橋で売られました（山本嘉兵衛の店は現在の「山本山」）。

お茶は「根入りの金（ねいりのかね）」

お茶の味に関していえば、その後、多摩湖・狭山湖ができたおかげで、狭山丘陵では霧が多く発生するようになり、この霧によって日差しがさえぎられて、甘く良いお茶ができるようになったといわれています。

また、狭山丘陵では、かつて雹（ひょう）がよく降りましたが、多摩湖・狭山湖ができてからは、雹が降らなくなったそうです。

農家は、お茶が春先の一番の現金収入となることから、お茶を売って、畑の肥料や作物の種を買いました。そのため、農家にとってお茶は「根入りの金（ねいりのかね）」といわれました。

狭山茶の製茶は大正年間にピークをむかえますが、現在では、地形・土壌などが茶樹に適している狭山丘陵の北部から北東部一帯が主な産地になっています。

「狭山茶は手もみが命」といわれますが、戦後になってから労働力が不足するとともに労賃が上昇したことと、機械も改良されて優秀なものとなったことにより、現在ではほとんどが機械製茶になりました。